# あなたのあやかし話

## 第１話　水たまり

母が子供の頃の話です。母には歳の離れた兄がいました。ある日の夕方、玄関先から兄を呼ぶ声がしました。あいにく兄は外出中で、そのことを伝えに行こうとしましたが、扉を開けると誰もいません。代わりにタタキがびしょ濡れになっていたそうです。やがて兄が帰宅して誰かが呼びに来たこと、玄関先が濡れていたことを話すと兄の顔色がサッと変わりました。なんとその日、桧原湖でボートに乗って遊んでいた兄の友人が水の事故で亡くなっていたのです。もしかしたらお別れを言いにきてくれたのかもしれない、と兄は言いました。母は今でもその日玄関先で見た水たまりが忘れられないそうです。
（めめめ）

友人や知人が死を告げに来る――この手の話は、枚挙にいとまがありません。不思議なもので、こういった体験を語る多くの方は「怖くなかった」と言い添えるのです。パーソナルな情報がない死者は〈恐怖〉でしかないのに対し、その素性をよく知る故人のメッセージには〈畏敬〉の念がこもるのですね。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 2 話　集合写真

とある舞台に出演したときのお話です。その日は千秋楽だったので、その場にいた出演者、スタッフ全員で集合写真を撮りました。各々携帯のカメラを使って撮影者を替えながら撮っていたところ、あるスタッフが撮った写真に誰もいるはずのない楽屋に通じる舞台袖から髪の長い女性が顔を出しているのが写っていました。その日来ていた関係者は全員舞台上にいて、楽屋には舞台上を通らなければ行くことは出来ません。他の写真も見ましたが、何故かその 1 枚にだけ女性は写り込んでいました。あの女性は何だったのか、今も謎のままです。
（ハル）

お芝居や舞台に関連した奇妙な話は、昔から多く伝わっています。ステージや袖の独特な暗さ、多くの人が行き交う雑然とした空気、そしてなにより〈非日常〉な空間が、人ではないモノを自然と引き寄せてしまうのかも……とは、私だけの考えでしょうか。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 3 話　家の間取り

これは妻が体験した話。
妻の実家は築 100 年の旧家だったが、 大学生の頃に取り壊して新築することになった。
新築してしばらくすると、 仏壇に置いてあるロウソクが無くなったり、 お供えしたお茶の量が減ったりするようになった。 不思議に思ったものの、 あまり気にせずに生活を続けた。 それからしばらくしたある日の夜、 妻が一人でリビングにいると、 人感センサー付きの玄関照明が点いた。 家族の誰かが帰ってきたと思ったが、 一向にリビングに入ってくる気配がない。 よくよく考えてみれば、 玄関扉の開閉する音がしていないことに気付いた。 恐る恐るリビングを出て、 別の部屋を見て回ったが、 やはり誰も居なかった。
そんな不思議な話を職場でしていると、 傍で聞いていたMさんから家の間取りを聞かれた。Mさんは神主としても活動している人だ。 一通り間取りを確認したMさんは、仏壇と神棚の天井に「雲」と書いた紙を貼りなさい、 と助言した。 仏壇と神棚の上階に部屋があるのは、 良くないということだった。
早速「雲」と書いた紙を貼ったところ、 不思議な現象は起こらなくなった。
（秋月幸水）

私も過去に何度か、「雲」や「天」と揮毫された紙を目にした記憶があります。いずれも神棚の上や天井に貼られていました。なんでもこの「雲」、比較的新しい風習のようです。考えてみれば昔の家は平家がほとんどですから、マンションや団地向けに考え出されたものだったのでしょう。そういう意味では、奥様の体験はなかなかのレアケースといえるかもしれませんね。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 4 話　深夜練習

大学時代、ダンスの練習をしていた時の話です。あの夜は後輩の自宅近くの公園に 5 人の参加者が集まって練習をしていました。最初のうちは何事もなく進んでいたのですが、プレーヤーから流れる音楽が徐々にノイズ混じりになり最後には全く音が出なくなってしまいました。電池切れかと思いましたがそういうわけでもなく、別の参加者の音楽プレーヤーで流したところしばらくしたら同じように音が流れなくなり、最終的に全ての音源が使えなくなってしまいました。練習をやめて後輩宅へ戻り、試しに曲を再生してみると今度はどのプレーヤーからもちゃんと音楽が流れました。あのノイズは一体何だったのでしょうか…

（来住野善二郎）

こちらは〈音の怪〉に分類できるかもしれません。まったくおなじ音というのは、二度と聞くことができません。録音していたとしても、それはあくまで〈記録した音〉であり、耳にした音そのものではないのですよね。そんな、再現できないという部分に怪が潜むというのも、なかなか興味深く思えてしまいます。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 5 話　テレビと一緒に引っ越してきた怖い人

息子が 2 歳半の時に、当時住んでいるアパートからすぐ歩いて行ける距離に一軒家を建てました。なんせ歩いて行ける距離なのでお引越しも気軽なものです。とりあえずテレビと食器を少し運び入れ、着替えやタオルなどのお泊まり道具（今後こちらが我が家になるのだから、お泊まり道具っていうのも変かな）をリュックに詰めて、お試しお引越しをしてみることにしました。
ちょっと話が遡り、当時住んでいたアパートでは、2 歳の息子が見えやすいように、テレビを少し低い台に置いていました。アンパンマンやらワンワンやらテレビにはキラッキラの大好きな世界が溢れていて「てベビー　てベビみるー」と可愛らしくおねだりされつついたのですが、いつの日からか「てベビにこぅわい（怖い）人いる」と訴える様になりました。
さてお試しお引越しの日。新居で夕飯をすませた頃また息子が「てベビにこぅわい人いる。」と訴えてきました。「あらあら新しいお家にも来ちゃったの？」とテレビを覗き込むとそこには黒い画面に人影が 2 つ。そう。電源の入ってない画面に映り込んだ私たち親子の影が 2 つ。アパートではテレビが低い位置だったため、角度的にわたしには見えて無かったのです。あぁこれかー！と息子の言いたかった事が理解できて嬉しくてたまらなくなり、息子に「お母さんにもやっと見えたー！よしこれお母さんやっつけておくね！」と伝えた時の息子の満足そうな顔！
実はこのやりとりが偶然息子がいたずらして録画しっぱなしにしていたビデオカメラにバッチリ残っており、2 歳の息子からはこんなふうにお母さん見えてたのかーと照れ臭い思い出です。
後日談　息子の撮ったビデオには、テレビの怖い人も、怖い人＝私と息子のどちらも写っていました。
（もりっちょ）

これはなかなかゾクリとする話です。後半部分では〈子供の視点から見た意外な真実〉が、なかば笑い話として語られています。ところが最後の二行、後日談によってその真実はぐにゃりと歪んでしまうのです。短い文章だけでは解読しきれないのですが、テレビに映っていた〈怖い人〉は、本当にお母さんと同じ顔をしていたのでしょうか……？

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 6 話　同じ人に何度も遭遇した話

休みの日の、真昼間。両脇に一軒家が並ぶ住宅街の中にある真っ直ぐな道を、私は家に向かって歩いていました。一つ目の十字路で、その人は左側から私の歩いている道へ出てきて、そのままま っすぐ歩いて行きました。外人なんて今や珍しくないけど、髪の毛の色が綺麗な事と、足が綺麗だなと思ったくらいで、そこを通り過ぎました。

そして二つ目の十字路。その人はまた、左側から私の歩く道へ出てきました。特に迷っている感じもなく、ただただ、普通にさっきと同じようにまっすぐ歩いて行ってしまいました。ボーっと歩いてたから、見間違い？勘違い？かな？とも思い、私はそのまま通り過ぎました。

3つ目の十字路。また！左から出てきました！しかも今度は、私が歩いている道に合流し、私と同じ方向へ進み始めました。

しばらく私はその人の後ろをついて歩く形になり、突き当たりの T 字路で、その人は左へ曲がって行きました。「えーそっちいくの！？何処行くのー！？」と心の中で思ったものの特に怖さを感じなかったのは、あまりにも健康的な見た目と歩き方だったからだと思います。変な体験でした。

後日談がありまして、私、あの道ほぼ毎週通るんですが、この辺のはずと思う距離の間に、十字路 3 つ無いんですよね。グーグル MAP も見てみましたが、道がない。左から出ては来れますが、右に抜けられる道がありません。

あの外人、狸だった可能性も出てきました！

（K.S.）

「十字路で奇妙な体験をした」という部分に、私は強く惹かれました。辻というのは自分たちの世界と〈それ以外の場所〉との結界だとされています。ゆえに道祖神や庚申塔が置かれたのです。そのような場所で遭遇した異人――やはり、普通の人間とは思えませんよね。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 7 話　朝の挨拶

これは母が叔父から聞いた話。
早朝、 叔父が畑で農作業をしていたときのこと。 腰が疲れたので立ち上がり、 休憩していると、 遠くで誰かがこちらに向かって手を振っていた。
よく見ると知人のAさんだったため、 こちらも手を挙げて挨拶を返した。
農作業が終わり、 家に戻って一息入れていると、 電話が鳴った。Aさんの訃報だった。 詳しく話を聞くと、Aさんの死亡時刻は今朝で、 老衰のため自宅で亡くなったという。 それでは、 畑で挨拶を交わした相手は誰だったのか。
「Aさんがお別れの挨拶をするため、 旅立つ前に会いに来てくれたのだ」と叔父は受け止めたという。
（秋月幸水）

一話目とおなじ〈旅立つ人との邂逅〉です。朝の光のなか、畑のかなたで手を振り続ける A さんの姿が、なぜか私の脳裏には浮かんでいます。単に〈幽霊〉と聞けば恐ろしく思える体験も、よく知る人であった瞬間に意味が変わりますよね。怪談が長く好まれるのは、我々が〈幽霊がいるのなら、もう会えないはずの人と会えるかも〉と願っているせいかもしれません。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 8 話　押入れのおじさん

これは忘備録として書かせてもらいます。
私は昔、 集合住宅の 5 階建てくらいの市営アパートに住んでいました。 多分 3～4 歳くらいだったと思いますが、 その当時の記憶で唯一、 鮮明に覚えてる話をします。
ある日の夕方、 台所に立つお母さんに、 かまって欲しくて邪魔をしていると、 夕食の準備が済むまで 1 人で遊ぶように言われ、 仕方なく奥にある部屋に行き、 おもちゃで遊ぶことにしました。 押し入れの下段にある 4 つ引き出しのついた大きめの緑色のケースが、 私のおもちゃ箱でした。 そしていつものように押し入れを開けると、 そこに見慣れた緑色のケースは無く、 その代わりに、 見知らぬ“おじさん“が膝を抱えて座っていたのです。
おじさんは幼い私から見てもとても汚い格好で、 そして身体中に怪我をしているみたいでしたが、何も発することもなく、 ただ正面を向いて座っていました。 でも、 そのあまりにも異様な雰囲気に恐れ慄き、 まず知らない人が家にいるという恐怖で、 大声で泣いて騒いで、 お母さんを知らないおじさんが居ると呼びに行き、 その部屋まで連れて来ましたが、 その時にはもう、 いつもと同じ様子で・・・。 あの“おじさん“の姿はもうありませんでした。
その後それと同じ出来事が 2 回続けて起きて、 私は完全にオオカミ少年状態。 3 回目はもう、 押し入れを閉めて、 その場を立ち去ることしか出来なかったです。 それからはその押し入れが恐怖で、 その部屋に 1 人で立ち入ることさえしなくなりました。
ただある日、 きっともうそろそろ大丈夫かな、 もうあのおじさんは流石に居ないよね？と、 少し気になるくらいの余裕が出てきた頃、 勇気を振り絞って、 思い切って押し入れを開けました。 そしたらなんと今度は、 白い着物を着て髭を生やしたおじいさんがあのおじさんと同じように膝を抱えて座っていたのです。
また誰か出て来るかもと少し予想していたのか、 以前ほど驚きもせず、 何故か少し心に余裕もあって、 なおかつ以前のおじさんほど怖い雰囲気がなかったので、 そのおじいさんを観察してみることにしました。 私が距離を取ってすぐに、 お祖父さんは押し入れから出てきて、 部屋の中心に立ち、こちらを見ました。 お互いに何を話すでもなく、 目が合ったまま沈黙の時間は過ぎ、 おじいさんはまた押し入れの中に戻りました。 なんとなく閉めて欲しいような感じだったので、私は押し入れをそっ

と閉めました。
その後、 押し入れから誰かが出てくることはなくなりましたが、 そのおじさんとおじいさんは一体誰だったのか・・・？謎のままです。
ちなみに、 当時はあのおじさんやおじいさんの格好が、 他の人と違い、 普通じゃないという認識しかありませんでしたが、 後に TV か何かで戦時中の映像を見て、 なんとなく見覚えのある格好に、おじさんは軍服を着ていたということを知りました。おじいさんも同じように、白装束だったことを知り、2 人ともこの世に存在する人では無かったんだと後に分かって、 ゾワっとしました。
今思えばそれ以外にも、 不思議体験がたくさんあって、 お墓にあるはずのない骸骨が並んでいるのを見たり、大好きだったおじいちゃんのお通夜で、とても綺麗な人玉を見たり、小学校の時に登った山の中で侍も見たし、 私は多分、 今で言うところの“見える人“だったんだなと思います。
(S.Y.)

傷痍軍人とおぼしき男性、そして屋敷神然とした老人――どちらも奇妙な〈居候〉ですね。家に憑いているのか、それとも S.Y さんが“見える人“であったがために、自分の存在を訴えたのか。出現した場所が〈押し入れ〉であったのも気になります。もしや S.Y さん（もしくはそのご家族）は“見える“のみならず、彼らを寄せつけないほどの力があったのでは……そんな想像をしてしまいます。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 9 話　初めての恐怖体験

コロナが流行り、会社の壁にセンサー感知性の体温計が付きました。 朝出勤すると、社員は列を作って熱を測ります。しかしうまくセンサー感知できなかったり、 逆に 37.5 度あったりすると「すみません、 もう一度お願いします」と警報が鳴ります。
ある日のことでした。 繁忙期の真っ只中、私は仕事が終わらず残業をしていました。他の社員はすでに帰っていて、 事務所には私 1 人でした。「ウチの会社は出るよ」という同僚の話は聞いていましたが、 私は今まで霊障にあったことがないので、 話半分に聞いていました。午後 9 時を回った頃です。「すみません、 もう一度お願いします」体温計が鳴りました。警備の方でも通ったのかな？と思いましたが廊下は真っ暗です。「すみません、 もう一度お願いします」そのすぐ後に子供が走るような軽い足音で、 誰かが真っ暗な廊下を駆けて行きました。そのあとも警報は鳴り続けます。 でも誰一人として体温計の前には居ないのです。私は気味が悪くなり、 仕事を切り上げて退勤しました。後日、 霊感があると言う上司にこれを話したら、「今度は子供が入ってきたか～。 いや、 スーツの人は歩いてるんだけどね」とおっしゃっていました。これが私の初めての恐怖体験でした。
（みかづき）

タイムリーな、コロナ禍だからこそ起こった怪異譚ですね。AI はじめテクノロジーがどれほど進歩しても、〈彼ら〉はきっちり順応して、自身の存在をこちらに訴えてくるようです。
けれど、なによりも恐ろしいのは上司の方のひとことですね。非日常が日常とは……。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 10 話　虫のしらせ

高校生の頃、 寝室で寝ていると、 思いがけなく目が覚めた。 時計を見ると 4:30。 起床の時間には早すぎる。 いつも寝てしまうと朝の目覚ましが鳴るまで起きないのになぜだろう、 と布団の中でぼんやり考えていると電話が鳴った。 電話の呼び出し音は間もなく止まり、 両親の寝室から話し声がした。 通話を終えた両親が私の部屋に入るなり、「入院中のじいちゃんが危ないと今病院から電話があった。 すぐに向かうので支度しなさい」と言った。

急いで病院に向かい、 病室に入ると、 機械が弱々しく祖父の心拍数を表示していた。 それから少しして心肺停止を告げる機会の音が鳴った。 祖父は家族に見守られながら、 眠るように旅立った。 あのとき目が覚めたのは、 祖父が知らせてくれたものと思っている。

（秋月幸水）

直に姿を見せる死者もいれば、予感や予兆で自らの別れを告げる死者もいます。肝心なのは「本当に祖父が起こしてくれたのか否か」ではなく「自分がそのように感じたのは何故なのか」かもしれません。怪談は死者の物語ではなく、残された生者たちの物語なのです。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 11 話　体を抜けていったもの

祖父が他界するとき、 私の母が体験したものだ。
私たち家族は祖父が危篤との連絡を受け、 急いで病院に向かった。 病室に入った私たちは、 祖父の傍に集まり、 祖母と母はそれぞれ祖父の手を握り、 声を掛けていた。 祖父は家族の到着を待っていたかのように、それから少しして旅立った。
葬儀屋とお葬式の打ち合わせを終えて、一息ついた頃、母がポツリといった。
「そういえば、 お義父さんが亡くなる直前、 握っていた右手が痺れるような感じがあって、 それが右足先の方へと抜けていった感覚があったんだけど、 あれは何だったのかねぇ」
（秋月幸水）

前回とおなじ話者による、これまた不思議な話ですね。そういえば「人が亡くなると、死体は 21 グラム軽くなる」との俗説があります。もしそのような変動が本当にあるのだとしたら、減った 21 グラムは魂の重量なのでしょうか。お母様の体内を、21 グラムの魂が通り抜けていった――そう考えると、謎の痺れもなんだか腑に落ちます。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 12 話　おばさんのメンタル

なんとか予定の新幹線に乗った。午前中のこの時間なら、夕方前に帰宅できる。二人掛けのシートに一人で腰を落ち着けた。隣は空席。帰宅後の家事のことや、会ってきた就活中の息子のことを考えた。体調は万全ではないが、もう少しの辛抱ねと思った。発車まであと数分、車内の席はほぼ埋まっている。気がつくと話し声が聞こえてきた。

「うん、うん…、そう、そう」

どこかのおばさまが、携帯電話で話しているのだろう、はっきりと声が聞こえる。前の席か。でも、発車すれば止めるだろう。だが、上野駅に到着しても続いている。

「うん、うん…、そう、そうよね」

上野駅を発車した。まだ会話は続く。低めで、少しかすれた、年配の女性の声。さすがに迷惑行為だ、が、他の乗客に気にする様子はない。私の席がおばさまの後だから声がよく響くのか。運が悪かった。大宮駅に到着した。

「そこに座るんですけど」

紺のスーツ姿の男性二人が、前席のおばさまに声をかけた。

「あ、すみません、すぐどきます」

痩せた背の高い中年男性が立ち上がり、近くの家族が座っている席へそそくさと移動した。あれ、前の席はおばさまが座っているはず、なんで男性が。スーツの男性二人が前席に腰掛けた。携帯電話はまだ続いている。

「そうなの…、うん、うん…、そう、そうよね」
前の席ではない。では、どこの席から。目が合えば止めてくれるか。席に着いたまま首を伸ばし、視線を周囲に回らす。乗客に変わった様子はない。自分だけが焦れている。馬鹿らしくなって、携帯を気にしない様にした。
宇都宮駅に新幹線は滑り込んだ。始発駅からここまで、車内で携帯で話すおばさん、メンタルすごいわと小さく毒づいていると、おばさんの声の音量が、ラジオの音量を絞る様に少しずつ小さくなった。
「うん…、そう…」「そうよね…」「そうなの…」
相槌を延々繰り返す話し声は、宇都宮駅発車後には聴き取れなくなった。
（KK）

滑らかな筆致、流麗な会話。かなり書き慣れている方とお見受けしました。なにげない、ともすれば空耳で済ませてしまいそうなひとコマを、ぞくりとする話に昇華させたのはひとえに文章の力でしょう。「そうよね……」と呟いていた声の主は、宇都宮駅で下車したのでしょうか。それとも単に沈黙しただけで、じっと車内に佇んでいたのでしょうか。東北新幹線に乗る機会の多い身としては、郡山以北では下車してくれるなと願うばかりです。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 13 話　白い家

私が住んでいた地域では、 免許を取ったら必ずと言っていいほど行く場所がありました。 白い家（仮称）といって、 いわゆる肝試しをする幽霊スポットです。 当時は遅くまで空いているお店も少なく、 海岸線にあり家から 20 分ほどで行けるその場所は、格好のドライブ先でした。週末になると多くの若者（いわゆるヤンキー）なんかが集まってきて、 結構にぎわっていました。

私が先輩から聞いたその白い家に関する話はこうでした。

「もともと医者の家で、知的障害か、精神を病んでしまった男の子が入院したらしい。ある日その男の子が、 医者の家族を皆殺しにして行方不明になった。 無念に思った医者が夜な夜な白い家をさまよっているらしい。」

私は当時付き合っていた彼女といっしょに、 先輩から聞いた話をしながら親から借りた車に乗って、 白い家に向かいました。 幽霊よりもヤンキーのほうが怖かったので、ヤンキーも（幽霊も？）出没しない昼間に行きました。 その建物は海水浴場の駐車場のはずれにある国道のアンダーパス（トンネルみたいなもの）をくぐった先にありました。 普段は車を止めてからそのアンダーパスを歩いてくぐるのですが、小雨が降っていたので、 車でそのまま行くことにしました。 アンダーパスの入口側には公衆電話があって、 いろんな貼紙やゴミなんかが散らかっていました。 アンダーパスの先は薄暗い林になっていて、 進むと木の間から白い建物が見えてきました。 それが白い家です。

男の子が入院して閉じ込められていたという二階の窓には鉄格子がはめられていて、 壁にはスプレーで落書きされていてひどい有様です。 その時彼女が、「誰かついてきてるかな。こんな何もない場所。公衆電話で電話しているのかな？あれ？立っているよね？」と振り返りながら言いました。 私は何度か先輩たちに連れられてきていたので、 僕らの他にも肝試しに来ているのがいるんだろう程度に考えていました。きっと怖くてアンダーパスを入ってこれないんだろうなと。「そうかもねぇ」なんていい

ながら車を止めて白い家を眺めました。 すると今度は「二階の窓から女の子がこっち見てる？あれ？見てる気がするんだけれども」彼女が僕を怖がらせようとしているんだと思いました。「男の子が見ているのならまだしも、 階段も壊されて無くなっているのに、 女の子が二階に上れるわけないじゃん！」
それでも彼女がだいぶ怯えている様子なので、 引き返すことにしました。 でも車のエンジンがかからないのです。 さすがにちょっとビビりました。 ハンドルを彼女に任せて僕が車を押すことにしました。「急いで！早く！」と彼女が急かします。 車内のルームミラーから見える彼女の視線は、 僕よりずっと後ろの建物を凝視していたように思います。 何とか押してアンダーパスを越えて公衆電話を過ぎたあたりで、 エンジンをかけなおしたところ、 全く問題なくエンジンが掛かりました。 帰りの道中は、 青ざめた顔で「肩が重い」としか彼女は話してくれませんでした。
その時のデートでの話を、 別の先輩にしたところ、「あれ？お前二階に上がったことなかったっけ？」先輩によると、 二階にはぬいぐるみがたくさん並んでいて、 閉じ込められていたのはどうやら女の子らしいこと。 そこの家のお父さんが公衆電話で電話をかけたのを最後に行方不明になっているとのことでした。 彼女にはなにが見えていたのでしょうか。
（Tkb 48）

怪談というよりは、どこか都市伝説めいた印象の話ですね。〈心根を病んだ人物が医者の私宅に逗留する〉〈出現するのは殺された医師である〉〈幽閉されていた女の子が行方不明〉など、どこかチグハグな細部がそのように思わせるのでしょうか。
そういえば、心霊スポットと呼ばれる場所には「白い家」あるいは「ホワイトハウス」と名づけられた廃墟が少なくないのです。語感の良さや、闇に浮かぶ白壁の不気味さなど理由はさまざま考えられますが、なんとも興味深い相似ではありませんか。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 14 話　何かがいた家の話

前に妹と住んでいた一軒家での不思議体験です。
その家は二階建ての一軒家で、 一階にリビングと妹の部屋、 二階に私の部屋がありました。 ある日、 私が夜家に帰るとリビングに電気が点いていたので、 妹がいるのかな？と思い、 顔を出しに行くと、 妹は二人がけのソファーで気持ちよさそうに寝ていました。
私がただいまーっと声を掛けると、 私の声で起きた様子の妹はぼーっとした感じで、 おかえりー、 何処行ってきたのー？と、 私に聞いてきました。
私が今仕事から帰ってきた事を伝えると、さっき一回帰ってきたでしょー？とまた聞かれたので、 何だろう？と思っていると、 私が帰る少し前、 妹がソファーで寝ていたところペチペチ頭を叩かれて起こされたらしいのです。
それで、 なんとなく目を開けたら、 寝ていたソファーの頭側に置いてあった椅子に誰かが座っていて顔を覗き込んできたそうです。 妹はそれを私だと思って無視してまたそのまま眠り続け、 しばらくするとまたお姉ちゃんが帰ってきたから、 コンビニにでも行ってきたのかと思ったとの事でした。
私じゃない時点で、 気持ち悪いわーと思いますが、 私だと思うくらいだから嫌な感じはなかったんだろうし、 眠りを妨げられたくらいで特に害はないようだから、 まぁいっか？こんなとこで寝てんなよって事だったのかねー？っていう感じで話がまとまって、 それぞれ部屋に戻った気がします。
その家では他にもあって、 リビングの真上の 2 階の部屋を私は使っていま

したが、その一階で妹が寝ていたソファーの位置と同じ位置にベッドをおいて寝ていた時期は、何回か金縛り？（夢かも知れない）にあっていて、その時は私の寝ているベッドの側、足元の方に真っ黒い何かがいて、何かしてくるわけでも、近づいて来るわけでもなく、ただワサワサ動くだけでした。しかもだいぶ激しく（笑）。金縛りにあっているし怖いはずですが、それがあまりにも激しく動くものだから逆に面白くなってきたのを覚えています。

ただ眠りを妨げる、特に害の無い何か、がいた家のお話でした。

（K.S.）

「家」にまつわる奇妙な話は、私たちをとても不安な心持ちにさせます。自分を守ってくれるはずの空間が、怪の舞台となる。その恐ろしさは別格です。なにせ、逃げられないのですから。そこへ帰るほかないのですから。もしも我が家でおなじことが起きたら――そんな想像をめぐらせてしまいます。それにしても、体験者も妹さんも剛の者ですね。家に対する安心感がそうさせるのか、はたまた生来の性分がタフなのか。奇妙な同居人よりも、むしろ姉妹おふたりに興味がわいてきます。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 15 話　不思議な話

奈良にいたころ、 いつ倒れてもおかしくない古いアパートを借りました。 炊事場も風呂も共同で、 隣の人の話なんか筒抜けです。 家賃は平成の世の中ながら一万円でした。

このアパートは、 目の前に神社があって、 古墳に囲まれているような立地でした。 山陵町というくらいなので、 古くからお墓が多くある場所だったのでしょう。 アパートは神社の森の陰で一日中薄暗かったことを覚えています。 とにかくボロくて、 入居する際に、 床も天井もすべて貼りなおしてピカピカに磨きました。 ひとつ気になったのが、 その部屋の柱には古びたお札が貼ってあり、 なにかがあっては気持ちが悪いと、 入居の際にこのお札だけは触らないでおくことにしました。

ある日、 なぜ掃除をする気になったのか覚えていませんが、 たぶん気分転換に掃除をして、 柱のお札を本当になんとなく剥がしたのです。 その後満足したからなのか、 急に眠気が襲ってきて横になりました。 しばらく寝たのか、 すぐ起きたのかよくわかりません。 枕元にあった時計を見ると確か、4 時半か 5 時ころだったと思います。 でもそれが夕方だったのか、 朝だったのか覚えていません。

壁も薄いアパートです。 その日もドタバタと足音が聞こえます。 めずらしいことでは無いのですが、 どうも住人の足音ではないのです。 アパートには入りきらないほどの大人数の足音が廊下を通り過ぎています。 と、 同時に自分が金縛りにあっていることに気が付きます。「20 歳になるまでに心霊体験がなければその後は体験しないらしい」と先輩に聞いていた私は残り数週間で 20 歳が終わる時に金縛りにあったことで「ああ、 これが心霊体験かな」とわくわくしつつ、 まだ冷静でした。

すると足元から声が聞こえてきました。「こいつかな？」「いや違うな？」「この部屋にいるからこいつだろう。 連れて行こう」「そうだな」「そうしよう、 そうしよう」と聞こえた瞬間に足首をがっちり掴まれて引っ張られ始めました。 ギュッギュッと強い力で足の方へ引っ張られる感じがするのです。 実際には体が動いていなくて、 意識だけ

引っ張られている感じです。
もう冷静でいられません。 声も出ないので、 隣の人を呼ぶこともできません。「ナムアミダブツ、 ナムアミダブツ・・・」そこまで信心深くないので、 普段は仏壇に手を合わせることもありませんが、 その時ばかりは念仏を唱えました。 声も出ないので心の中で何度も唱えました。 すると金縛りが解け、 取るものとりあえず、 部屋から抜け出して一目散に友人の家へ逃げ込みました。 友人は寝ていましたが、 たたき起こしてそれから一か月ほど居候することになりました。
数日して、 そのアパートに 10 年住んでいるといわれる先輩に話を聞いてもらいに行きました。 入口の10センチほど空いた扉から、「しばらくどこいってたの？」と聞かれ、私は一通り話を聞いてもらいました。 するとそのことが起こった日付だけ確認されました。 そして今忙しいからまた明日来てくれと扉を閉められました。 次の日、 改めて先輩を訪ねると「実は君が金縛りにあった日なんだけれど、 以前君の部屋に住んでいた〇〇君が東京の多摩川で浮いているのが見つかった日なんだ。」「ほらそれにその日から彼がおいていった洗濯機が故障したままなんだよな」というと、 また扉を閉めたのでした。
もしかしたら、 私が間違って連れていかれるところだったのでしょうか。 その後、 魔よけのお札を頂いてきて元あった場所に貼りなおしました。
（Tkb 48）

古墳の多い土地。目の前にある神社。柱に貼られたお札。そして、ラストで明かされる過去の住人……怪談につきものの要素が「これでもか」と言わんばかりに盛られた、漁村の食堂で出てくる海鮮丼、あるいは学生街のトルコライスを彷彿とさせる話です。それにしても、体験者の部屋を襲った複数の声は何者だったのでしょう。道連れを求めたかつての住人か、それともお札の封印を解かれた異形か……謎が解明されない点が不気味な余韻を残しています。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 16 話　その足音は誰のもの

私が小学生の時のお話です。
2 階建ての我が家。 私の部屋は階段をのぼってすぐの場所にあり、 その奥に両親、 兄の部屋があります。 両親と兄がそれぞれの部屋に行く為には必ず私の部屋を通る事になります。
両親は共働き、 兄は大学生だった為、 夕方はいつも私だけが家にいるいわゆる「鍵っ子」でした。 一人でいる為、 必ず玄関や窓の鍵はしっかりと閉めて家に入ります。
ある時、 私が自分の部屋でごろごろしているとふと、 階段をのぼってくる音が聞こえました。 私は階段をのぼってくる足音で両親なのか、 兄なのか判断する事ができるのですが、 その足音は妙に軽やかで両親のものとも兄のものとも言えない音でした。 時計を見ると家族が帰ってくるにはまだまだ早い時間。「どろぼう？」と怖くなりましたが私はしっかりと鍵をかけ、窓は 1 ヶ所も開けていない事を思い出して、 とりあえず部屋でじっと耳をすませました。 両親のちょっとどっしりとしたスリッパのパスパスした音が重なった足音でも、 兄の素早くかけあがってくる足音でもありません。トントンと確実に知らない足音が近付いてきました。ドキドキしているとやがて階段を上りきった後、 ぺたんぺたんと足音がして、 私の部屋でぴたりとやみました。
私は早く帰ってきた兄がイタズラをしているんだろう、 そう強く思って「お

兄ちゃんでしょ！？」と勢いよくドアを開けると誰もそこにはいませんでした。
その直後、 1階の玄関のドアが開く音がして普段この時間には帰ってこないはずの母親が帰ってきました。 私は怖くて大パニックになりながら 1 階へ下り、 母親に今ほどの話をしました。 念のため窓や鍵、 2 階の部屋全てに異常がないかみてもらいましたが何もありませんでした。 結局あの足音がなんだったのか、 誰だったのかはわかりません。 だけど私は紛れもなくあの階段をのぼってくる足音、 私の部屋の前で誰かが立っていた事は確かなのです…。
（おさしみ伯爵）

こちらも「家」に関連した話ですね。誤解を恐れずに申しあげるならば、体験そのものは頻繁に聞く類のスタンダードなものです。しかし、他の事例と一線を画している部分が一点、この話にはあります。〈普段この時間には帰ってこないはずの母親が――〉お母さん、なぜそんな時間に戻ってきたんでしょうか。偶然であったのか、それとも何かを感じとったのか、実は足音の正体に心当たりがあるのではないか……そんな不安が拭えない、奇妙な逸話です。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 17 話　ぐるぐる便所

新潟では有名なドライビングスポット越後七浦シーサイドライン。 ここは観光名所であり、 夏は海水浴客が多く訪れる場所でした。 かなりの数の心霊スポットが点々とありました。 白い家もあってそちらも有名でした。
その中では、 あまり有名ではありませんが、 ぐるぐる便所というのが噂としてありました。 ぐるぐる便所は、 ちょっと耳に残るふざけたような名前なので、 気にはなっていました。 場所も車通りに面してるらしいので、 暇つぶしに行ってみることにしました。
このころ頭文字 D はもうありませんでしたが、 当時乗っていた 86 に乗り込み現地へと向かいます。 土曜日の夜となると、 いわゆる走り屋が列をなしてこのシーサイドラインを走っていたものでした。 私もその中の一台でした。 度胸はないので交通ルールを守るなんちゃって走り屋です。
このぐるぐる便所なのですが、 悪い男たちに襲われてしまった女性がそれから逃れるため道沿いにあったこのトイレに逃げ込んだとのこと。 執拗に女性を追いかけてきた男たちから逃げることができずに、 女性は自らここで命を絶ったそうです。 使用を中止してロープがグルグルと巻かれた様子からぐるぐる便所と呼ばれるようになったそうです。
実際に言われた場所とは違う場所にそれらしい建物はありました。 ロープはぐるぐる巻きにはなっておらず、トイレの個室にそれぞれ板が打ち付けられているだけでした。 故障したのでしょうか。「トイレ 50 メートル先」と書いてあります。 たしかに 50 メートル先に仮設のトイレが置かれていました。 ここがトイレなのにわざわざ 50 メートル先を案内しているので、 やはり故障したのかなと思いながらも、 その建物を一周してみました。 友人はトイレに入り込もうと板を叩いたりしながら、「だれかいるならでてきなさいよ」「隠れても無駄ですよ」など大きな声を出しながら、 怪らしい場所をのぞき込んでいました。

私はその時、 足元に落ちていた瓶を蹴ってしまいました。 壊れたトイレに捨てられた瓶。 この辺に遊びに来る走り屋かヤンキーが捨てたものだろうと思って、「きちんと捨てろよ」と頭にきて拾い上げたのです。 やや重さのバランスが悪くて空ではないことが持ち上げて分かりました。 そしてそれはただの瓶ではなく、 花が生けられた花瓶だったのです。 近くには線香の跡もあり、 どうやら誰かが何かのためにお供えしたもののようです。 一緒に来た友人は、 先ほどから板をたたいてまだ中に入り込もうとしています。 僕は足元に戻した花瓶を指さし、 帰ろうと声をかけました。 どうやら騒いで良い場所ではないようです。 手を合わせてその場を去りました。
事実は結局わかりませんでしたが、 後日この話を全くしていない彼女とこの場所を通り過ぎたことがありました。 その時、 この建物を眺めながら「あっ」と小さな声を出したのを聞き逃しませんでした。 何か見えたのか、 怖くて聞けませんでした。
その後もしばらく板が貼られたまま、 このトイレが壊されることなくその場にあり続けていましたが、 その理由も定かではありません。
(Tkb 48)

こちらも心霊スポットに因む、なかば都市伝説めいた物語です。「ぐるぐる便所」というネーミングはやけにユーモラスですが、その謂れを知った瞬間に読者はゾクリとします。これが「自殺トイレ」や「女の出る手洗い」であったなら、ギャップから生じる怖さは抱かないのではないでしょうか。仮にこの事件が事実だったとしても、あるいは噂に尾鰭がついたものだとしても、命名した人物はなかなかのセンスだと感じてしまいます。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 18 話　祖母との再会話

祖母は私が高校生の頃に亡くなっています。
私は祖母が亡くなった時、 なんで寂しがっていたのに会いに行かなかったんだろうと凄く後悔していました。
祖母が亡くなって数ヶ月経った頃、 祖母が好きだった菜の花畑を見に行く夢を見ました。 車の中で父を待ってる間、 祖母は笑っているのです。 私はハッとなって会いに行けなくてごめんねと謝りましたが祖母はニコニコ笑っているだけでした。
その数日後、また祖母と会う夢を見たのですが、夢の中でゴザのような所で目覚め、祖母を見ると白い着物を着ていました。
周りの景色は晴天で穏やかな景色、 周りの人も皆白い着物を着ていました。
私は前と同じくごめんねと謝ったところ、 祖母はニコニコ笑って頷いてました。
あの場所は何処だったのか、 きっと祖母は天国に行けたのでしょう。
夢にしてはハッキリと今も覚えている祖母との再会話でした。
（Nano）

東日本大震災の被災地で話を聞くなかで、印象に残った経験があります。〈目の前で消える女性〉の噂が立ったとき、地域に住む人は「それはきっと誰々さんだね」と怖がる素振りを見せなかったのに対し、東北圏外から来た工事関係者は「幽霊だ」と震えていたのです。おなじ存在であっても、顔や名前などパーソナルな情報を持っているかどうかで、「単なる幽霊」ではなく「親しいあの人」に変わるわけです。そんな出来事を思いだした、とても心温まるお話ですね。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 19 話　ミラーハウスでのできごと

私が小さい頃、 とある遊園地のミラーハウスに入った時の話です。
母と弟と一緒に遊びに行っていましたが、 2 人はミラーハウスに入りたくないと言った為、 私 1 人で入ることになりました。 入ってみると他の人は誰もおらず見えるのは沢山の鏡とそれに映る自分だけ…。
とりあえずゴールするために進みました。 その途中で行き止まりにあたってしまい、 どうしようかと周りを見渡すと、 ちょうど行き止まり（ 私の正面 ）の鏡に女の人が 1 人映っていて、 ただジーッとこちらを見ていました。
その時は「他にも人がいたんだな…」位にしか思わず、 しばらくその女の人と見つめ合ったあと、 またゴールを、 目指しミラーハウスの中を進みました。 しばらくしてゴールできたのですが、 そこでふとあれから一度も他の人と会わなかったなと思いました。
ちょうど外で待っていた母に、 私より先に女の人が出てこなかったか聞きました。 すると母からは「誰も出てきていない」と返答がありました。 じゃあ私の後に誰かミラーハウスに入った人はいたか聞きましたが「誰も入ってない」と返答がありました。
その時私はじゃあきっとまだゴールできていないんだろう、 大変だな位にしか思いませんでした。 しかし、 今思うと田舎の小さな遊園地でその日はそんなにお客さんが多くない日で、 ミラーハウスにも私たち以外に人はいませんでした。 実際、 その女の人と一度会った以外に他に人とは会っ

ていません。もし、他にも人がいれば、迷路の中で何回かすれ違う機会や声が聞こえるくらいのことがあってもよいのでは思います。
あれ、本当に人だったんでしょうか？
もしかしたらあの女の人は今でもミラーハウスの中を迷っているのかもしれません。
（なつき）

古来より、鏡は霊的な力を持つものとされてきました。三種の神器にも八咫鏡がありますし、閻魔大王の隣には亡者の罪を暴く「浄玻璃鏡」が置かれています。西洋でも「吸血鬼は鏡に映らない」などの俗信がありました。その鏡を全面にはりめぐらせたミラーハウス……何が起こっても不思議ではないと考えるのは、私だけでしょうか。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 20 話　あの湖の底

20 年前、 私が中学 1 年生の夏の話です。 家族と親戚で、 会津の東側に位置する、 あの有名な湖に行きました。 遊びはじめて 2 時間程でしょうか。 私は家族達から少し離れ、水深の深い場所で泳いでいました。 するといきなり、 何者かに片足を下に向かって引っ張られ、 溺れかけました。「助けて！」必死に叫ぶも家族達から遠い為、 声が届きません。水面に顔を上げようと必死にもがいていた矢先、 なんともう片方の足まで引っ張られ始めました。 両足を引っ張られ、 もうなす術もありません。 もう息も続かずに限界に達しようとした時です。「これ使いな！」と一緒に来ていたいとこの声が。 溺れている私に気付き、 浮き輪を持って駆けつけてきてくれたのでした。 私は浮き輪につかまり、 いとこに引っ張られ家族達の元へ。 事態を話すも、「足が攣っただけじゃない？」と軽くあしらわれるだけでした。それから何年か経ち、 一緒に行った家族達にあの時の話をするも、「家族と親戚で湖なんて行ってないよ！」「夢じゃない？」と、 誰もあの日の事を覚えていません。 助けてくれたはずのいとこさえも。 私も段々と記憶が薄れ、 もしかしたら、 湖に行ったことさえ夢だったのかもしれないと思うようになりました。
しかし、 つい先日、 当時 5 歳くらいで現在 20 代の妹と湖付近をドライブしていた時に、ふと妹が言いました。「昔、 家族と親戚とここに遊びに来たよね！懐かしい～！」。
やっぱりあれは、 夢じゃなかったようです。
（はにゃ）

「あの湖」にまつわる話は、私も数多く収集しております。その多くは、やはり湖底から何者かに足を引っ張られたという類のものですが、今回の話はそこにもうひとひねり加わっているのが興味深いですね。どうして家族は湖へ行った記憶を失っているのでしょう。本当に忘れてしまったのか、それとも思い出させまいと嘘をついたのか――どちらの理由であったにせよ、背筋がぞくりとしますね。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 21 話　逢魔が時の体験

ある日の夏の夕方、 18:00 頃だったと思う。 仕事が終わって片付けをしていたときのこと。
部屋の電気を消してふと、 辺りを見回すと足首から下が、 スタスタと壁の方に向かって歩いていき消えた。 その壁の向こう側には神社があるけど、ここは霊道だったのだろうか？？
（紗絵（さえ））

シンプルで簡潔ながら、思わず声を漏らしてしまうほど強烈なエピソードです。いいえ、むしろ起こった現象を淡々と描いているからこそ、怖さもひとしおなのかもしれません。日常の隙間からほんの数秒だけ顔を覗かせた〈非日常〉。その短さゆえに、理由も背景もわからない。もしかしたら、この手の話がいちばん恐ろしいのではないでしょうか。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 22 話　守られた私

私の通っていた高校は仏教を支持する高校で、 月に1回、 年に何回か法会のある学校でした。 当時生徒会長を務めていた私はある大きな法会でスピーチをすることになりました。 初めての大役で緊張と不安でいっぱいでした。 その前日、 失敗してはいけないと思い、 スピーチの原稿を手放さず1日を過ごしていたのです。 夕食を終え、 自分の部屋へ戻る時も階段を昇りながら原稿に目を通していました。 その瞬間、 階段を踏み外してしまったのです。「これは大怪我する！」一瞬ですがそう思いました。 そして一瞬ぎゅっと目を閉じ次に開いた時、 不思議なことに私は踏み外した段の3段上に立っていたのです。 どこにも痛みを感じませんでした。 どこも怪我することなく無事だったのです。 そして次の日、 法会でのスピーチは大成功を収めました。 もし怪我をしていたら、代わりにスピーチをする者もなく、法会は台無しになっていたでしょう。 私はあの時、見えないチカラに守られたんだと今でも思っています。
（実話です）
（竜崎こらる）

崖から滑落したのに無傷で、見ると尻の下に木彫りの仏像があった――そんな話を聞いたことがあります。どうも仏様という存在は、落ちる者を優しく受け止め、救ってくださる傾向が強いようです。釈迦牟尼尊者の掌（たなごころ）の上で暴れた孫悟空よろしく、我々は仏様の手に守られながら生きているのかもしれません。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 23 話　彷徨う警察官

20 年近く前の話です。 アルバイト先へ向かう途中、 不思議なことがありました。 その日も夜アルバイト先に向かうため歩道を歩いていると、 数 10 メートル前から、自転車をこぐ音とライトがゆらゆらゆれるのがわかりました。自転車がこちらへ向かってきていると思い、少し左に避けて歩いていると、私の右側をその自転車がゆっくり通り過ぎて行きました。 ずいぶん古いボロボロの自転車に、 ボロボロの服を着たその人は、 顔が骸骨でした。 まるで昔の警察官のような見た目でしたが、 顔は骸骨だったのをはっきりと覚えています。 慌てて振り返った時、 自転車をこぐ音とライトだけが静かに消えていきました。

（H.I）

「昔の警察官」という一文に、ぴくりと反応してしまいました。いったい、どのくらい昔のいでたちだったのでしょう。昭和のはじめ？　なかごろ？　そのあたりがはっきりすれば、骸骨警官の素性や背景を探れるかもしれません。追加報告、お待ちしております。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 24 話　落武者

学生時代の話です。夜、友人と城址公園付近を散歩し、そのまま友人宅で寝ていると、突然金縛りにあいました。声も出せず、うっすら目を開くと、友人宅の部屋が、一面紅葉が美しい山の中の様な風景に変わりました。そして、少し遠くから、ガシャンガシャンという足音が聞こえてきたかと思うと、私の顔の前で足音が止まりました。見えたのは、鎧を身につけた落武者でした。次の瞬間、誰が振りかざしたかわかりませんが、刀が振り下ろされ、目の前の紅葉が、血でさらに真っ赤に染められた風景が見えました。隣で寝ていた友人が、私の異変に気づき、体を揺すってくれたので、金縛りはとけましたが、友人の顔は青ざめていました。友人は私に、「何かおかしいって気づいて目が覚めたんだけど、怖くてすぐには起き上がれなかった。私の後ろに、何かいなかった？」と言いました。友人も、部屋に現れた不気味な落武者の存在に、気づいていたのです。

（H.I）

昭和の怪談実話（当時は実録体験や恐怖体験などの名前でしたが）ではレギュラーメンバーであった落武者。「平成半ばあたりから登場する頻度がグッと減ったな」と思いきや、令和になってよもやの再登板です。では、なぜ落武者の報告が減ったのか？　個人的には「時代劇の衰退などによって、落武者を目にする機会が減ったためでは」などと考えているのですが、皆さんはどう思いますか。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 25 話　見えない住人

結婚を機に夫が住む一戸建てへ引っ越しました。その家は、結婚する前から、夫が中古で購入し、一人で住んでいた場所でした。夫は出張が多く、家にいないことが多かったですが、子どもが産まれ、ママ友もでき、充実した日々を過ごしていたある日、ママ友が家に遊びに来ました。玄関に入ってすぐ、「あれ？おばあちゃん一緒に住んでたんだね。手土産足りなかったかな。」と聞かれました。不思議に思いましたが、「おばあちゃん？いないよ。うちは3人暮らしだから。」と返しました。しかしそれからというもの、不思議な事が続いたのです。勝手に電化製品の電源が入ったり、一歳の息子は、誰もいない部屋で壁に向かって手を振ったり、まるで自分たち以外に誰かがいるようでした。しばらくして、引っ越すことになり、引っ越しの日、別のママ友が家に見送りに来てくれました。その人は、外から2階の窓を見上げて、「あれ？おばあちゃん一緒にいたんだね。」と言ったのです。

（J.S）

Ａさんという人物の証言を補完するように、事情を知らないＢさんが同様のセリフを口にする…怪談の定石、恐怖譚の王道であります。ＡさんＢさんともに、本人たちは「不思議な出来事」と思っていないあたりが非常に怖い。それにしてもお婆さん、何者だったのでしょう。お子さんが手を振っていたということは、悪いモノではなかったのだろう…と信じたいのですが。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 26 話　正夢

数年前の春、 夫が慕っていた先輩が交通事故で亡くなりました。 それからというもの、 夫はとても落ち込んでいて、 夢でいいから先輩に会いたいと言っていました。 季節は夏になり、 8月の未明の話です。 いつものように、 和室で夫と二人並んで寝ていると、ふと目が覚めました。私は横向きで寝るのが癖で、その日も、 目を覚ますと目の前に夫が寝ていました。 時計をみると、 まだ四時くらいでした。 起きるにはまだ早いと目を閉じようとした時、 背後に気配を感じました。 不思議と怖くはありませんでした。 ゆっくりゆっくり体を反対側に向けると、 そこにいたのは、 春に亡くなった先輩でした。 目は合いませんでした。先輩は、 夫の顔を覗き込むように、 前傾になって、 正座していました。 私はまたゆっくり体を夫の方へ向けました。 10 分ほど経ったと思います。 すっと気配がなくなりました。 朝、 目覚めた夫が、 私に「あれから初めて夢に先輩が出てきてくれた」と言いました。 私は先程先輩が来たことを伝えました。 お互いびっくりしましたが、 暖かい気持ちになりました。

（和田）

「不思議と怖くはありませんでした」「目は合いませんでした」など、なにげなく綴っている細部に生々しさが漂っています。話者が先輩を目撃した際の所作もリアリティに満ちており、明け方の寝室がありありと脳裏に浮かびます。八月、時まさにお盆という時期も絶妙ですよね。ささやかながらも非常に印象深い、胸に沁みる話でした。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 27 話　突然鳴ったオルゴール

20 年前、 同居の祖父は、 共働きの両親の代わりに私たち姉妹を温かく見守っていましたが、 自宅療養中に亡くなりました。 その後、 姉が結婚することになり、「祖父にも花嫁姿を見せたかったから、 披露宴には写真を持ってきて欲しい。」「きっと生きてたら、 喜んで出席してただろうねー」と家族で話していたところ、 壁にかけていたオルゴールが突然鳴りました。 それは、 紐を強く下に引かないと鳴らないものです。 祖父が姉の結婚を喜んでいたのかも……？ それ以前にも以後にも鳴ることはありませんでした。

（マユユ）

あくまで私の体感ですが、「死者の知らせ」を告げるツールとして、チャイムや電話と並んで多いのがオルゴールなのです。考えてみると、オルゴールって自分で買う機会はあまりないですよね。むしろ、身近な人からプレゼントされる機会が多いですよね。もしかしたら、そのあたりに答えがあるのかもしれません。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 28 話　大きな猫

もう 10 年も前の事ですが、とても不思議で悲しくせつない体験をしました。その頃、家にはチャムという 16 才の、おばあちゃん猫が居ました。たいてい毎日、家の周りを 10 分程度散歩して家に帰って来るのですが、その日はいつもと違い、日中のお散歩には行かず家の中で 1 日過ごして居ました。私は、その日に限って用事があり、夜どうしても外出しなければなりませんでした。普段は夕方、窓を閉めるのですが、どういう訳か、夜外に行かない猫なのに、何となく外に行きたいような気がして、その日は窓を少しだけ開けて外出しました。帰宅して車から降りた時に 10 メートル先位に見たこともないような、とてつもなく大きな、トラほどの猫が居たのです。しかも、その猫が地面に向かっておいでおいでしているように見えました。優しい感じではなくて急かしているような、大人が愚図っている子供を引っ張って行くような感じです。草むらになっていて、地面に何が居るのか解りませんでしたが、今のは何？何かの見間違いだろうと思い込もうとしました。家の中に帰ってみると猫は居ませんでした。不吉な感じがして、あちこち捜しましたが、何処にも見当たりませんでした。今思うと天から大きな猫がお迎えに来て連れて行ったのではないかと思います。私が帰宅するまで、頑張って待っていてくれたのではないかと思います。明るくなってから大きな猫を見た辺りを見回しましたが特に変わった様子もありませんでした。もちろん亡骸も見当たりませんでした。家出する状況では無かったので、あれが我が家のチャムとの、お別れだったのだと思います。今でも、トラのように大きくて白くてフワフワした猫の姿をはっきりと覚えています。あれは何だったのかいまだに不思議でなりません。

（ちゃむ）

私も学生時代に似たような経験をしています。愛猫が亡くなった数日後、家の前に見たことのない巨大な虎猫がいたのです。「もう逝ったよ」と告げると、虎猫は黙って立ち去り、その後二度と姿を見せませんでした。人間の世界にも死神（という単語が不吉なら天使と言い換えましょうか）がいるように、猫の世界にもあの世への案内猫がいるのかもしれませんね。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 29 話　排水管の奥にいるのは・・・？

僕自身が体験した話です。ある日、大きな排水枡の金網の上を通ったら、底から「ウォ～ッヘァッハッ！ウォ!?ウォワァ～～!!…」という、 獣の咆哮と人間の男の高笑いの中間のような、おぞましい大きな音（声…？）が鳴っている…。 音源らしいものは底には見えず、 排水管の奥に？？ 気になって 10 分ほど聞いていても止む気配はなく、 底に石を落としても変化は無し。 そこで、 ひとまず声の主に意思があるのか無いのか調べようと思い、蓋を思い切り蹴って、 ガシャーン！と音を鳴らしてみたら……音がピタッと止んだ！音に反応して止んだ、 ということは、 意思を持った何かの声だ！！！と判ってしまい、 途端にゾッとしてその場から逃げた。 その後いろいろな可能性を考えても、 やはり「声」だったという結論以外どうしても考えられず、 かと言ってあんな声を出す生物も思い当たらない（ 人間以外…。）なんだったんだろうか…。
（しゅんた）

時代が時代なら、あるいは地域が地域なら、きっと「それは河童だよ」という話で丸くおさまるのでしょうね。ぜひ、排水枡がある地区の歴史を調べてみてください。もしかしたら河童伝承や水神信仰、あるいは似たようなシチュエーションの記録が見つかるかもしれません。不思議な声を足がかりに、地域を掘り下げてみるのも一興かと思います。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 30 話　映りこんだ手

高校時代、 放送部での話です。 あの日は夏休み期間中の教室を利用して、 大会に向けて数分間のミニドラマを撮影していました。 順調に撮影は進み、 A が隣の席の B に話しかける、 そんなありふれたシーンのとき、カメラマンの子がアッと声をあげました。「今、 手を振った奴がいるから撮り直し！」……命じられて、 みんなキョトンとしてしまいました。 だって、誰も手を振ったつもりは無いし、 その手を見た生徒も居なかったのです。……録画を確認すると、その手はちゃんと映っていました。 A の手2本と、B の手2本と、 誰の手か分からない、 もう 1 本。 まだ、 部室に有るかな、あのビデオ。

（長門美歩）

見たい！　そのビデオ見せて！　お願い！……失礼、興奮のあまり取り乱してしまいました。ほとんどがフェイクと知りながらも、私たちは心霊映像に胸躍らせてしまいます。〈記録〉は〈記憶〉と別種の恐ろしさを持っているのです。怪異を〈再生〉することで、新たな怪異に出遭ってしまうのです。いや、ぜひ鑑賞したい。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 31 話　なぞの音

あれは、私がまだ実家にいた頃の事です。夏に高校生の私は、夜中まで本を読んだりして起きていました。外から何かを引きずるような音が聞こえてきました。丁度、鉄がコンクリートに擦れるような音でした。その音が私の部屋の窓の外辺りを行ったり来たりしていることに気がつきました。別に音だけなので気にしていませんでしたが、夜中まで起きている時必ず聞こえるので、だんだん気になってきました。私の窓の外は隣の家と近く、通り抜けできるような造りではありません。気味悪く思いましたが、音の正体を確かめてみたくなり、音が窓の前に来たとき、思いきって窓を開け、大声で「毎晩うるさい!!」と叫んでみました。でも、そこには何もなく、それからは音を聞くこともなくなりました。今だになぞです。
（ガルク）

「鉄がコンクリートに擦れるような音」という一文を読んで、私の脳裏にはなぜか僧侶の姿が浮かびました。手にした長い錫杖をがらんがらんと引きずりながら、家の周囲をさまよっている――そんな姿を想像してしまったのです。え？　なんでそんなふうに考えたのかって？
実は私も幼いころ、似たような音を聞いているからです。そのとき、窓の外に見知らぬ僧侶を発見したからです。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 32 話　沖縄の修学旅行にて

これは私が中学生の修学旅行でおきた話です。 私の学年では修学旅行先が沖縄で2泊3日だったのですが、 最終日に戦争に関わる場所を巡っており、 その中で防空壕の中を見学していました。中はとても暗くライトを頼りに友人と引っ付きながら歩いていました。 ある広い空間でガイドさんの説明を聞いているとき、 後ろに嫌な気配がした為振り向くと黒い影が私の真後ろに居たのです。私は驚いて前を向きましたが気になって再度後ろを見ると先程の影は消えていました。 気のせいかと思いながら、ガイドさんの先に進むようにという合図があった為歩こうと踏み出すと、 空間の左上辺りから男性の声で「うー痛いよー」と苦しむ声が聞こえてきました。 聞こえてきた方向は戦時中に兵士が治療をしていた場所だったのです。 先程の黒い影のこともあり、 恐怖のあまりその場で泣き出してしまいました。 今もあれがなんだったのか分かりませんが無事成仏している事を願うばかりです。

（A.K）

沖縄へ旅行に赴いたおり、防空壕やガマで不思議な体験をした……その手の話は枚挙にいとまがありません。ご存知のように、沖縄は第二次大戦において約２０万人の犠牲者を出した場所です。そのうち約９万４０００人が女性や子供をはじめとする一般市民でした。つまりは苦悶の声も黒い影も、彼ら彼女らの「忘れるなよ」という訴えなのです。どれほど恐ろしくとも、私たちはその姿を目に焼きつけ、その声に耳を傾ける義務があるのです。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 33 話　見えない同行者

何年か前にとある城跡の資料館に行った時の話です。 行ったのは私と母の 2 人。 受付で料金を払うのに「大人 2 人です」と声をかけると、 受付の人が私たちの足元の方を見ながら「お子さんは一緒じゃないんですか？」と聞いてきました。 私も母もびっくりして辺りを見ましたが子供の姿はもちろんありません。 奥にいた別の受付の人が、「子供なんていないでしょ！」と少しびっくりした表情で出てきました。 とりあえず、 大人 2 人分の料金を払い入館しましたが…。 あの受付の人には私たちには見えていなかった子供が見えていたのでしょうか？そしてその子はいったい誰だったのでしょうか？少し不思議な経験でした。
（なつき）

「ファミレスで人数より多いお冷やを運ばれた」という話は珍しくありません。しかし場所が城址になった途端、別な可能性がにじんできます。子供に言及した受付係とは別な人物が〈びっくりした表情で〉出てきたという部分も興味深いですね。あわてて有耶無耶にしようとする言動。もしやその人、何かを知っているのでは…。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 34 話　夢

ある時、 不思議な夢を見ました。 真っ白な草むらに日本家屋が建っていて、そこの縁側から二人の女性が笑いながらこちらを見ているのです。 しかも驚いたことに、 女性の一人は私の祖母でした。 そしてもう一人は祖母の妹さんではありませんか！勿論二人は数年前に亡くなっています。 私はすぐに「これは夢だ」と思いました。 実は私、 子供の頃から夢を夢だと認識できる面白い特技を待っているのです。 そしてこの夢は現実と変わらないほどにリアルなものでした。 気が付くと、 祖母が目の前に立っていました。 ゆっくり私の手を取り、「最近会えないねぇ」「仕事忙しいもんねぇ」と言うのです。 私の体はなぜか動きませんでしたが、 かろうじて「ごめんなさい」と言えました。 すると祖母は「頑張りなさいよ」と一言。 そしてその瞬間夢は醒めました。 涙が頬を伝っていて、どうやら私は寝ながら泣いていたようでした。 数日後、 仕事でご無沙汰していた祖母のお墓参りに出かけました。 私を心配した祖母がきっと夢に出てきてくれたのだと思い、 心を込めて静かに手を合わせました。

（EIKO）

夢の中で「これは夢だ」と認知できる――明晰夢というやつですね。そんな能力を有している話者をもってしてなお、夢とは思えぬ生々しさがあったという点に、そこはかとない怖気と、お祖母さまへの愛情を感じてしまいます。遠慮がちに墓参をせがむ祖母姉妹もなんだか微笑ましく、読後にしんみりしてしまいました。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 35 話　待ち伏せ

私の曽祖父が若い頃の話であるから、 昭和の初め頃のことではないかと思う。 彼は肴と酒を買いに出かけた。 当時、 近くに商店などがなかった為、 わざわざ徒歩で隣村の店まで行かねばならなかった。 買い物を終わり、 肴と酒を鞄に入れて家に向かって歩き出した。 時刻はすでに夕暮れを過ぎ、 暗くなった林の中を通る道をとぼとぼと歩いていた。 前方に女が一人佇んでいるのが見えた。 俯いて、 誰かを待っているようだ。 脇を通り過ぎようとすると、「すみません」と声をかけてくる。 なんでしょうかと聞くと家に帰れず困っているのでお家に泊めて頂けないでしょうかと言われた。 当時の事とはいえ、 もう少し歩けば集落へ着くにも関わらず、 暗くなった林の中でじっと誰かを待っていたのかと思うと気味が悪かった。 女の顔は、 困っている様子も感じられず、 表情なく真っ直ぐこちらを見つめている。 申し訳ないが、 断ろう。 すみませんが、 今日は知り合いが泊まりに来ていてうちはだめですと答えてそのまま道を進んだ。 すると、 女は後ろをついてくる。「すみませんが、 すみません」だから今日はダメだって、 と答えても女は「すいません」と繰り返すばかりだ。 無視して歩いていると、 女の声がおかしくなってきている。「ずぎょばぜんがずぎょばぜんが」何を言っているのかすら聞き取れなくなっている。 驚いて振り返ろうとした瞬間、 女が走り出して身体にしがみついた。 はっと気

がつくと家の前に倒れていた。 時間は既に真夜中になっていた。 あれは何だったのだろう、 と鞄を見たところ、 肴と酒が綺麗になくなっていたという。

（煙鳥）

巧い。起こった怪異もさることながら、書きぶりに唸ってしまいました。結末から鑑みるに、いわゆる「狐に化かされた」系の話ではと推察するのですが、文中ではひとことも女の正体に言及しておらず、それが怖さに拍車をかけています。徐々におかしくなる声音も得体が知れずぞっとしますね。語り手・書き手によって怪談の質が変容するという好例です。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 36 話

父が小さかった頃、 母親である祖母の実家のおばあさんが危篤との連絡を受け、 急いで実家に向かった日のことです。 当時は車もないので、 小さな峠を越えて隣の町まで、 祖母、 小さかった父、 叔母と 3 人で歩いて向かったそうです。 夕方に出発したので、峠を越えた頃には真っ暗になっていました。 田舎の田んぼ道、 街灯もない真っ暗な中を、 小さな懐中電灯を手に 3 人で進みます。 もうすぐ着く…という所まで来た時、 突然、野球ボールくらいの光る球が 3 人の頭上を飛んで行きました。 一瞬のことでしたが、 真っ暗なはずの田んぼ道なのに、 周りに生えている草木の一本一本まで、 ハッキリと見える程に明るかったそうです。 その後、 祖母の実家に到着すると、 たった今、 おばあさんは亡くなったよ、 と告げられたそうです。 父達は、 あの光る球はきっと亡くなったおばあさんの魂だったのではないか…と思ったそうです。

（伊藤ふく）

かつては怪談の定番アイテムだった「人魂」や「火の玉」も、最近はとんと聞かなくなりました。謎の発光体が活躍できる暗闇が少なくなったためでしょうか。そのせいか、この手の話には郷愁をくすぐられてしまうのです。あの世へ旅立つ間際、夏の終わりの蛍のごとく瞬いて消える――儚いノスタルヂヤにため息がこぼれます。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 37 話　入院中に茶色の婆

長期入院中の出来事です。 夏も終わりに近づき、 近隣の花火大会も無事終了し、 何となく街の雰囲気も落ち着いてきた頃でした。 わたしが入院していたのは四人部屋で、 夜は完全にカーテンを締め切って寝るようにしていました。 夜中、 いや～な気配を感じ眼をうっすら開けたら足側・通路側のカーテンがなぜか少し開いていました。 すると、 背が低く異様に猫背の肌も着物も全身茶色いお婆さんがヒョコヒョコとソコを通り過ぎて行きました。 ゾクッと寒気がし、 見てはいけない！と思い、 咄嗟に目を閉じました。 しばらく経ち、もう行ったかなぁと目を開けると、茶色婆がベッド横に居て、 顔を合わすように眼前で見つめていました。 わたしはその瞬間から記憶がなく朝になっていました。

（ウーサー）

「まっくろな人影」や「全身赤い人型のモノ」は見聞きした憶えがあれど、茶色というのは初めてかもしれません。黒であれば「死」、赤だったら「血」など、それぞれの色から想起するイメージがあります。さしずめ茶色は「病」でしょうか。黒ほど禍々しくないけれど、赤ほど凄惨でもない。ちょうどその２色を混ぜた色。そう考えると、茶色は黒よりも、赤よりも不気味に思えてきます。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 38 話　古いお墓の話

小学生の夏の思い出。 父母が近所の畑に行ったと聞いていたので、 夕暮れ時に父母を迎えに畑へ行きました。 畑には誰もいませんでした。 畑の先には古い墓がありました。 すると土の中から読経のような人の声が聞こえてきて怖くなり自宅に帰りました。 自宅に帰ると父母がおり、「畑にいると聞いてたから迎えに行ったら怖い声を聞いたよ」と伝えると、 父母はその畑には行っていないとのことでした。 きつねにつままれた気分と恐怖にさらされたひとときでした。
（みはるきつね）

みはるきつねさんのご実家はどちらなのでしょうか。もし山形近郊だったら面白いな……と、勝手に考えてしまいました。山形県には「即身仏」というものがありました。僧侶が千日のあいだ十穀を断ち、飢餓状態で土中に埋まり、ミイラ仏となる風習です。土のなかへ入定した僧は、絶命するまで経を唱え続けるのです。もしや、墓から聞こえた読経は――思わず想像を巡らせてしまった次第です。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 39 話　開いてない

ある、夏の昼下がりでした。私の両親と私、1歳半の息子の4人で TV を観ていた時のことです。ふいに背後の引き戸が開く音がして、家族全員（私の息子も）引き戸の方を振り向きましたが引き戸は開いていませんでした。その部屋は家の隅にあり、他の部屋の音が響くような場所にはありません。以前から不思議な体験をすることが多い部屋だったので、「誰かが入ってきたのかな」と家族と話しています。
（こんママ）

これも「音の怪」の一種と考えてよいかもしれません。西日本には〈畳叩き〉という誰もいないのに畳を叩く音が聞こえる怪異が伝わっています。引き戸の音をさせたモノも、畳叩きの仲間なのでしょうか。興味深いのは家族の会話ですね。怖がるふうもなく「誰か入ってきたのかな」とは、ずいぶん豪胆なリアクション。感心してしまいます。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 40 話　育つ白い影

私が小学3～4年生のある日、 夜中に目覚めトイレに向かいました。 当時私は妹と母親と同じ部屋で寝ていて、 トイレは寝室を出て廊下の突き当りにありました。 何度となくトイレに起きることはあったので いつものように廊下の電気を付けず真っ暗な廊下を進みトイレの電気をつけてトイレに入ります。 いつものようにトイレから出て電気を消して寝室に戻ろうと…ふと電気を消す前に何気なく寝室の方に目をやると、 自分と同じくらいの背丈の白い影が立っています。 その瞬間、 トイレの電気を消したので真っ暗になり、 白い影も闇に消えてもう居るのか居ないのかも分からなくなりました。 不思議と怖い気持ちはなく、 そのまま影のあった寝室の方に向かい、 そのままその日は眠りました。
それから数年後、私が高校生の時です。当時、同じく高校生だった妹が、あの白い影のあった部屋を勉強部屋として使っていたのですが、夜中に何度となく金縛りに遭うというのです。
そして、 ある日、 あの廊下を進み部屋の前で立ち止まり部屋の扉を開こうと手を伸ばした時に、 ふと横の壁を見てみると その白い壁に自分と同じくらいの身長の白い影が浮かんでいるというのです。 妹には私が小学生の頃に白い影を見たと話していなかったので、 その時、 初めて自分も小学生の頃に白い影を見たと話し、 白い影の背丈が育っていることに気が付きました。 その後、 白い影を見ることは無いので、 今はどうしているのか分かりません。
（こんママ）

家のなかで白い影を目撃する――ありがちなエピソードのように思えるかもしれませんが、こんママさんの話には興味深い点があります。それは、影の背丈が伸びている点。「目撃した人とほぼおなじ身長」というあたりに、なんらかのヒントが隠されているような気がするのですが……なんとかしてもう一度、遭遇できないものでしょうか。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 41 話　遺品

私の地元にはダムがあり、 湖底にはかつてそこにあった村が沈んでいます。小学校の時の担任の先生は親戚の家がその村にあったそうで、 度々遊びに行ったことがあると言っていました。 これはその先生から聞いた話です。
ダムの建設が決まり親戚の家をはじめ村の家々は立ち退きの準備に大忙しだったようです。 ダムに水が注がれ村が水の底へ沈んでしまって暫くたったある日、新居にて荷解きをしていると家族の方が「前の家に忘れ物をしてしまった」とあたふたしていました。 一体何を忘れたのか聞いてみると、 亡くなったお爺さんの遺品である眼鏡を置いてきたらしい、 とのことでした。 親戚の方もこれはえらいことだと家中ひっくり返して探しましたが見つかりません。 やっぱり置いてきてしまったんだと肩を落とした家族の方を宥めてその場は終わりました。それからまた暫く経ち新居で迎える初めての命日の朝、 親戚の方はお線香をあげようと仏壇の前まで来て驚いたそうです。 仏壇の上、 お爺さんの遺影の前にはずぶ濡れの眼鏡が置いてあったそうです。
（淡屋大三治）

忌日に遺品が還ってくる――それだけでも驚くのに、まるで水から引き揚げられたかのごとく濡れていたとあっては、ご家族の驚愕たるや並大抵ではなかったことでしょう。
さて、ひとつ疑問が。眼鏡を仏壇に置いたのは、亡くなったお祖父さまご本人だったのでしょうか。それとも、湖底に沈んでしまった村の産土神あたりでしょうか。そんな「答えの出ない不思議」に思いを巡らせてみるのも、なかなか楽しいものです。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 42 話　信玄餅

作り話のようだと自分でも思いますが、 実際に体験した話です。 ある日帰宅すると、 親戚のお土産で信玄餅があると母から言われました。 台所に行ってみるとテーブルの上に信玄餅が 1 個、 どうやら最後の 1 個のようでした。 蓋を開けて黒蜜をかけようかと思ったら、 きな粉が容器の中にぼろっと崩れたのです。 一瞬何だかわからなかったのですが、 きな粉の下にあるはずの餅がなかったのです。 餅を入れずに出荷されたものがあるとは考えにくいし、 誰かが餅だけ食べたにしても上のきな粉を崩さずに食べるのは不可能ですし、未開封の状態まで戻すのは尚のこと無理でしょう。 狸に化かされた、 狐につままれたような妙な感覚に陥りながら残ったきな粉に黒蜜をかけたのでした。

（屋良樫亭節松）

私、この手の「ささやか怪談」とても好きなんです。喧伝してまわるほどではないけれど、自分のなかではクエスチョンマークがずっと消えない……そんな話って、誰でもひとつやふたつ、ありますよね？
ささやかな日常にそっと寄り添う、輪をかけてささやかな非日常。しぶしぶきな粉に黒蜜をかけたという結末ふくめ、なんとも素敵なエピソードです。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 43 話　だれですか？

今から 20 年以上前に看護師として働いていました。 産婦人科の病院で毎日忙しく、 1 日 1 日が過酷でした。 その日は、 夜勤で比較的落ち着いており、 一緒に仕事をしていた同僚は休憩にいきました。 赤ちゃんたちに授乳を終えて、 ナースステーションで記録を書いていると、 新生児室から「カサカサカサ」と音がしてきました。 その後に、 人がひそひそ話をしている声が聞こえてきました。 その直後に、 今まで寝ていた赤ちゃん達が一斉に泣き始めました。 ビックリした私は新生児室にいきましたが、その「音と声」はやみました。 今でも、 あの体験は何だろう？と、 不思議です。

（やまま）

病院と怪談は切っても切れない関係ですが、その多くは亡くなった患者さんの目撃譚など、死者にまつわるものです。今回のように「なんだかわからないモノ」は珍しいですね。本来なら寿ぐべき、新しい命が集まった場所。それが却って恐ろしさに拍車をかけています。赤ちゃんたち、いったいなにを感じていたのでしょう……。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 44 話

私自身は幽霊や心霊現象などに出会ったことは一度もないのですが、私の弟が何度か体験しているのでその話を投稿します。

一つ目です。もう何年も前になりますが、私達家族は福島県内の某湖に湖水浴に行きました。その湖には岸から少し離れたところに人工の浮き島があったので、皆でそこに行こうと一斉に泳ぎだしました。しかし一番下の弟だけ泳ぐのが遅く、私達から遅れてしまってそのまま沈んでしまったそうです。もがいても浮き上がることができず、弟は「これは死ぬかも」と思ったそうなのですが、そのとき真っ黒な影のような女の人が弟を抱きかかえるような形で岸まで押し上げてくれたのだそうです。そして岸まで着いて弟がお礼を言おうとしたときにはもう姿はなかったのだそうです。この影のような女性のことを弟は最初は私（投稿者）だと思ったのですが、とにかく真っ黒でとても人間ではなかったと話しています。この影の女性に助けられなかったら弟はどうなっていたのかと思うとゾッとします。

二つ目です。その日は祖父の命日でした。祖父は弟が生まれる前に亡くなっているので弟は写真でしか見たことがありません。弟が家でゲームをしていると家の廊下に写真で見た祖父らしき人が立っていたのだそうです。それも透けていて下半身がないのだそうです。祖父らしき人はそのまま廊下からトイレの方へと消えていったそうです。普段は怖がりな弟ですが不思議と祖父らしき人の霊は怖くなかったそうです。命日なので祖父が家に帰ってきていたのかなと思います。

（y.k）

まさかの二話一挙掲載です。湖の黒い影、姿こそなにやら禍々しく思えますが、命を救ってくれたということは、湖のヌシなのでしょうか。それともご家族を守っている存在なのでしょうか。実はどこの湖なのか、ぜひ今度こっそり教えてください。

二話目も非常に興味深いですね。お祖父さまを目撃した弟さんは、湖で謎の影に助けられた方と同一人物なのでしょうか。だとしたら、不思議な体験が少なくないですね。もしや、彼自身が……いや、これ以上は言いますまい。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 45 話　夢で見たこと

ある夏のことです。私は夢をみました。内容は私が母方の実家のとある部屋で、仏壇をみているというものです。ただ、じーっと仏壇を見ているだけで、その他特に何もありませんでした。しかし、現在母方の実家に仏壇はありません。私はなんでそんな夢を見たんだろう？と不思議でした。その後、母方の実家に行った際に、私は祖母に何気無しにこの家の夢に出てきた例の部屋に昔仏壇があったことはあるかと聞いてみました。すると祖母の口から「あんた、何でそんなこと知ってるの？」と返答がありました。母方の祖父母が住んでいる家は元々祖母方の家で、祖母のお兄さんが別に家を建てることになった際に、元々の仏壇は供養してもらって新しい仏壇を祖母のお兄さん宅に用意したとのことです。お盆も近い時のことだったので、ご先祖様たちが何か私に伝えたいことあったのか。もしかしたら、元々仏壇があった家、自分たちが過ごしていた土地に戻って来たいというメッセージだったのかもしれません。

（ひかり）

「奇妙な夢」の話は枚挙にいとまがありません。とはいえ、部屋までドンピシャとあっては「夢を見ただけでしょ」と笑い飛ばすことも難しいですよね。ご先祖さまが姿を見せて訴えるのではなく、仏壇をじっと見せる……なんだか奥ゆかしいようにも、「供養しろ」という無言の圧を与えているようにも感じてしまいます。いったいどちらなのでしょう。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 46 話

娘が 5 歳の時に、 娘を猫可愛がりしていた義父が亡くなりました。 文字は勿論、 いろいろなものをなんでも娘に教えてくれた優しい義父でした。葬儀のことでばたばたしていたのですが、 ある夜中に娘がわーっと泣いて起きました。「おじいちゃんが真っ黒い怖い顔の人を連れてこっちを見てた！後ろに火がすごい勢いで燃えてて怖かった！」とわぁわぁ泣き、 でも長泣きせず、 またぱたっと寝てしまったのでよかったとほっとしました。明けてその日は初七日、 お経をあげにお坊様が来て下さったのですが、そのお話を聞いて鳥肌がたちました。「死ぬとね、 七日ごとに偉い仏様がおじいちゃんに会いにきてくれるんだけど、 今日は、 おじいちゃんがお不動様にお会いになる日なんですよ」真っ黒い顔はお不動様、 炎は迦楼羅炎。義父は最期に娘にお不動様を見せたかったのです。そして泣きじゃくる娘をよしよしと慰めてくれていたと、 今でも信じています。
（KOGE）

焼死者めいた禍々しい存在かと思いきや、まさかまさかの守護神。なるほど、たしかに不動明王のご尊顔は恐ろしいですものね。合点が往きました。最期に孫へいいものを見せてやろうという（まあ、その結果泣かせてしまうわけですが）お義父さんの心遣い……生前の可愛がりっぷりを容易に想像できる、素敵な話ですね。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 47 話　祖母からのメッセージ

十数年前、 実家の祖母の葬儀が終わった日の出来事でした。 葬儀が終わり、 自宅に戻り祖母の祭壇に火を灯し手を合わせた後、 普段通り家族で夕食を取ってました。 私と母が隣合わせで座り夕食を食べていた時のことでした。 私と母は、 同じタイミングで「はっ！」っと、 びっくりした顔で互いを見つめ合いました。 私が母に「聞こえた！？仏壇の鐘の音？」と聞くと、 母が「うん。 カーン！って聞こえたね！」と言って二人で顔を見合わせました。 祖母の祭壇に行くとロウソクの火が消えていました。 父や祖父には全く聞こえず、 私と母にだけに仏壇の鐘の音がはっきり聞こえたのです。 あれは、きっと祖母からの「今までありがとう」のメッセージだったかな？と思っています。
（ハーくんママ）

怪談を集めていると、ときおり「女性だけが見るもの」「女性だけに聞こえたもの」といった話に出会います。理由など探りようもないのですが、口寄せ巫女など霊力を有する職業に女性が多いことと、なにかしら関係があるようにも思えてしまいます。いずれにせよ、メッセージが届いてお祖母さまも喜んでおられるのではないでしょうか。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 48 話　夏服の少年

築 70 年ほどの私の実家は今から 10 数年前にリフォームをして、それ以前とは間取りもすっかり変わりました。以前の間取りは、東向きの玄関を入って左手に和室、その奥に仏間と小さな和室。その前から右手に伸びる細く暗い廊下の左に両親の寝室と私の部屋が並び、廊下の突き当りに汲み取り式のトイレとお風呂。私の部屋の正面には居間があり、居間を挟んで右に父の書斎、左に台所がありました。台所の隅には土間の勝手口があって、その向こう側に兄たちの部屋があります。台所の土間の方に背を向けて、母は料理をします。母の立つ場所の後ろには冷蔵庫があり、振り返るとすぐに食材を取り出せるように配置されていました。今から 20 年以上前、私が小学生、兄が中学生の頃のこと。夏の土曜、いつものように台所に立つ母が、部屋から出てきた兄に言いました。「あれ？あんたいつ着替えたの？」その日の兄は黒い T シャツに半ズボン姿でした。母が言うには、少し前に土間の方から冷蔵庫の前に歩いてくる、白いシャツと黒いズボンの、ちょうど中学の夏服のような服装の子供を見たそうです。歩いてくる方向が兄の部屋の方だったので、「冷蔵庫におやつでも取りにきたな」と思ったのだそう。見たと言っても視界の端に入った程度だったので、服装は見間違いだったのかもしれません。実際、食べ盛りの兄が夏服姿で冷蔵庫を漁るのは、よくある光景でした。それから数年、兄はグングン背が伸びて、180 cmほどにまで成長しました。あ

る日母は、 兄を見て言いました。「やっぱりあの時の子、 あんたじゃないみたい。 あの子の身長、 今も変わらないもん。」母の前にだけ現れたあの夏服の少年がどこの誰だったのかはわかりません。 でも、 家をリフォームしてからすっかり姿を見せなくなってしまいました。 彼が通っていた台所の場所には今、 私の部屋があります。

（FA）

初めて目にしたそのあとも、母上は定期的に「夏服の少年」を目撃していたわけですな……ううむ、冷静に告げるお母さまが怖い。リフォーム後にいなくなったということは、旧家に憑いていたのでしょうか。なんだか座敷わらしめいた存在のように思ってしまいます。もし、FAさんの部屋に再登場したあかつきには、ぜひ福島県博までお知らせくださいね。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 49 話　温泉地での恐怖体験

数年前、 友人と二人で山形の温泉地に宿泊しました。 宿に着く頃には外は真っ暗で、 すぐ近くにその地区のお墓？があり、 泊まった部屋から正面の位置にありました。 何となく怖いなと思いつつ、 そろそろ寝る時間となり布団に入りました。 元々私は怖がりだったので部屋の照明を明るくしたまま眠りにつきました。 暫くして目が覚め、 ふと部屋の入り口の引戸に目を向けました。 すると僅かに戸が開き少し間を置いて長い黒髪の女性？が頭を出しました。 その時は顔は見えませんでした。 あまりの恐怖にその女性を凝視しているとコマ送りの動画の様なカクカクした動きで首を突き出し周囲を見渡していました。 次の瞬間 2m くらい先に移動しました。 前屈みで白い着物を着ています。 相変わらず顔は見えません。 隣の友達は何事もない様にすやすや寝ています。 そして次に移動した瞬間、 仰向けに寝ている私の真上にのしかかってきました。 私の真上にある顔は顔というより真っ黒く渦を巻いたブラックホールの様な状態でした。 ずっと私を見つめて？います。 私は息が出来ず苦しくて隣に寝ている友達に声をかけようと必死でしたが、 体も動かず声も出ずうんうん言っていました。 暫くして（それでも数秒～数分）友達が気付き声をかけてくれた瞬間、 私の上にいたものは消えました。 私は霊感もなくその様な経験は今まででその一度だけです。 以降不思議な体験はしていません。

（go）

私が暮らす山形は、全市町村に温泉がある珍しい県です。そんな温泉県のとある宿に、そんな恐ろしいモノがあらわれるとは……ぜひ、どちらの旅館のどの部屋か知りたい（喜）！それにしても、コマ送りのような動きといいブラックホール然とした顔といい、「人に似た人でないモノ」感が強く、それが恐怖を増長させますね。ああ……見てみたい（喜）。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 50 話　柿の木のそばに

私の祖母が亡くなって四十九日を迎える少し前に私が夢で見た話です。私は当時神奈川県に住んでいたのですが、夢の中で福島の実家に帰っていました。玄関を開けて家に入るとそこに祖母が立っていました。そして外を指さし「あそこにいるから」と言いました。私が「え？」と聞き返すと祖母は「そこの柿の木のそばにいるから」と言います。実家のその場所に柿の木はないので「あそこに柿の木なんてないでしょ」と思いながら祖母の指さす方向を見ると、夢の中では祖母が示す場所に柿の木があり、大きな実がたくさんなっていました。夢の中の私はその状況に疑問を持つこともなく受け入れ、祖母に「うん、わかった」と答えました。すると祖母が疲れたようによろめいたため私が支えると「もうだめだぁ」と言いました。その言葉を聞いた私は「そうか、おばあちゃんもう行っちゃうんだね」と思ったところで目が覚めました。後日、四十九日の法要で実家に帰った際、父にこの夢の話をしました。私が「おばあちゃんが夢でそこの柿の木のそばにいるって言ってたよ。そこに柿の木なんてないのにね」と話したところ、父が「お前が生まれる前、あの場所に柿の木があったんだ。おばあちゃんが言ってたのはその柿の木のことだろう」とのことでした。父の話に驚くと同時に、あの夢で見た祖母は本当に祖母だったんだなと思いました。祖母が指さした場所にあった柿の木は私が生まれる前になくなりましたが、その場所から数メートル横に新たな柿の木を植えて育

て、 現在もそこにあります。 四十九日には大きな実がたくさんなっており、親戚のみなさんが「立派な柿の実だね」と言いながら柿の木の周りに集まっていました。 祖母は柿の木に親戚の皆さんが集まってくることがわかっていたんだな、 柿の木のそばにいれば懐かしい人々と一緒に過ごせると思って柿の木のそばにいるって言ったんだなと思いました。 それにしても祖母はなぜ、 実家に住んでいる父や母ではなく、 実家を離れた私の夢に出てきたのでしょう？それだけが今でも不思議です。
（あひる）

前々回、「夢で仏壇を見た」話をご紹介しましたが、今回は柿の木です。お祖母さま、よほど柿の木に思い入れがあったのでしょうか。それにしても「あそこにいるから」とは、なんとも佳いセリフですね。空の上でも墓の下でもなく、みんなの近くに居たい……そんな思いを感じさせる、なんとも心に染みる言葉です。

黒木あるじ（怪談作家）

# あなたのあやかし話

## 第 51 話　病院の個室

わたしは、病院で看護師をしています。 先輩から聞いた話です。 ある日、いつものように患者さんが入院してきました。 個室に入院する予定だったので、 その病室に案内しました。 すると、 部屋に入るなり「個室って聞いてたのに」と怒り出してしまいました。 わたしは意味がわからず、 問い返すと「個室って聞いてたのに、もう、そこに患者さんがいるでしょ！」と。わたしには見えませんでしたが、 その患者さんにははっきり見えているようでした。 否定もできず、急いで他の部屋を準備して入院してもらいました。先輩に聞くと、 その部屋では同じようなことが何度かあるようです。
（めるちゃん）

看護師さんが目撃者となることの多い「病院の怪談」ですが、今回は患者さんが見てしまった話です。自分には誰の姿も見えていないのに、第三者は「そこにいる」と譲らない……もしかしたら、自身で目撃するより怖いかもしれません。いったいその部屋、なにがあったのでしょうか……。

黒木あるじ（怪談作家）